

## 純国産メンマサミット in 飯田 参加報告

参加者: 里山チーム 黒木健二、丸田理一郎

開催日: 2024年10月13日(日)

### 1. 12:00~13:00 『メンマストリート』と『竹資源活用事例ブース』の見学、調査

・『メンマストリート』では、全国各地で活動している各団体が出店して自前のメンマの試食販売実施。十分な見学・調査の時間が取れなかったが、各団体でご当地の特色を出せるようなレシピを考えられていた。

・『竹資源活用事例ブース』で、特筆すべきは、同じ三重県の桑名市の取り組みであった。竹工芸品、メンマ、竹由来ハンドクリーム等が並べられ、市民団体、行政、学校含む一般市民が参加し、桑名市全体で取組まれている活動内容と熱気が伝わって来た。特にメンマについては、日本各地に29店舗を展開する名古屋拠点の味噌カツチェーン『矢場とん』とタイアップし経済的にも循環可能な活動を達成できているところである。また、竹由来ハンドクリームについては、当初は学生主体で取組みを始め、ある化粧品メーカーを取り込んでデパート等で販売可能な製品にまで仕上げていることは素晴らしい。やはり、流動性資金を持っている一般企業とのタイアップが無いと経済的循環を生むのはなかなか難しいのかも知れない。

### 2. 13:00~16:00 講演会

#### 2-1. 『森の恵みで地域をモリアゲよう!』(株)モリアゲ 長野麻子氏

・OECD加盟国中で森林率3位である日本がこれから取組むべきことは、この豊富な森林資源を利用した『サーキュラーエコノミー』システムの構築であり、その経済効果は環境省の試算で約70兆円/年である。

・この森林資源を利用した『サーキュラーエコノミー』システムの構築における現状の課題は、「木材の用途不足」、「サプライチェーン不足」及び「安価な輸入材の増加」である。これらの課題を解決しながら、日本が持つ「自然資本」を未来につなげることが現代を生きる私達の役割である。

・上記『サーキュラーエコノミー』システムの構築は、『カーボンニュートラル』及び『ネイチャーポジティブ』各システムの構築と共に三位一体となって取り進めるべきものである。

・このうち『カーボンニュートラル』について、日本政府は2020年に、2050年までに温室効果ガス排出量をゼロとすることを国際宣言し、更に2023年GX(グリーントランスフォーメーション)実現に向けた基本方針を閣議決定した。GXの目標は、産業革命以来の化石エネルギー中心の産業・社会構造をクリーンエネルギー中心へ転換させ、温室効果ガスの排出量削減を中心とした気候変動問題への対応と、産業競争力の強化および経済成長という困難な課題に取組み、経済社会システム全体の変革を実現することである。温室効果ガスの排出量削減の様々な手法の中で最も有力なものは、経済市場原理に基づくカーボンプライシングとカーボンクレジットを用いる仕組みだと考えられる。2024年時点でのGXリーグ参加社は747社となっており日本経済を牽引する代

表的企業が多く参加している。この GXリーグにより、カーボンプライシングとカーボンクレジット取引が更に活性化され急激に増加していくと予想される。

- ・林野庁の試算によると、スギ林(人により管理されているもの)の CO2 の年間吸収量は 1 ヘクタール当たり約 8.8 トンである(因みに、日本人一人あたりの CO2 年間排出量は、約 9~10 トン)。

林野庁 Link

→ [https://www.rinya.maff.go.jp/j/sin\\_riyou/ondanka/20141113\\_topics2\\_2.html](https://www.rinya.maff.go.jp/j/sin_riyou/ondanka/20141113_topics2_2.html)

(公演後、講演者の長野麻子氏に竹林の CO2 年間吸収量やカーボンクレジット創出について問い合わせたが、残念ながら両者とも今のところデータが無く、計算方法も確立されていないとのことであった。)

- ・『ネイチャーポジティブ』の具体的な動きとしては、2022 年 12 月に COP15 で採択された「昆明・モントリオール生物多様性枠組」における、2030 年グローバルターゲットの 1 つに盛り込まれた「30by30(サーティ・バイ・サーティ)目標」がある。「30by30(サーティ・バイ・サーティ)目標」とは、2030 年までに陸と海の 30%以上を健全な生態系として効果的に保全しようとする目標であり、我が国でも 2023 年 3 月に新たな生物多様性国家戦略「生物多様性国家戦略 2023-2030」を閣議決定し、2030 年までのネイチャーポジティブ実現に向けた目標の一つとして 30by30 目標を位置付けている。

- ・30by30 の達成を目指すために重要なキーポイントは、国立公園等の拡充等の国や公的機関の活動 だけでなく、里地里山や企業林や社寺林などのように地域、企業、団体によって生物多様性の保全が図られている土地を OECM(Other Effective area-based Conservation Measures)として国際データベースに設定、登録し、その保全を促進して行くことである。つまり、国の取組を推進することに加え、民間の取組等によって生物多様性の保全が図られている区域を広げていくことも重要である。

- ・多くの科学的データから、森林を守ることが海洋の生物多様性保全にも繋がる事が分かってきている。

- ・講演者の長野麻子氏によると、全国各地での地域循環経済プロジェクトの成功例の多くは、流動性資金を持っている一般企業を引き込んでいるケースだとのこと。

## 2-2. 『竹をめぐる歴史とその生態を知り、共に歩む未来を考えよう』(国研)森林総合研究所 小林慧人氏

- ・タケはイネ科であり、世界の熱帯から温帯地域に広く分布。

- ・日本の竹林面積は、森林面積全体の約 1%。

- ・日本の大型のタケ類では、実生更生は見られない。

- ・タケの地下茎は、全体がひと繋がりになっているわけではなく、独立した地下茎の繋がりがいくつも地中にある状態。

- ・タケノコ(新竹)の生産は、①親タケの 1 年目からは派生しない。②親タケが 3~5 年目の間に多い。③寿命は 10 年程度。従って、このことは竹林を整備する上でも参考になる。

- ・日本の大型タケ類は、5~6 月頃に落葉する。

- ・孟宗竹は、落葉の隔年周期性が見られる。このことは孟宗竹のタケノコ(新竹)の豊凶作年との関係があり、凶作年に落葉量が多くなる(添付資料参照)。

- ・孟宗竹は、江戸時代に中国から輸入され、日本各地に移植された。

- ・明治時代には、タケヒゴが灌漑用に使われた。
- ・公演後、講演者の小林慧人氏にも、竹林の CO2 年間吸収量やカーボンクレジット創出について問い合わせた。学会等で公認されているわけではないがとのことではあるが、添付資料 2 を紹介頂いた。この論文によれば、一般的竹林 1 ヘクタール当たり年間約 5.5 トンの炭素固定量がある。つまり、一般的竹林の CO2 年間吸収量は 1 ヘクタール当たり約 20 トンであり、上記林野庁試算によるスギ林の CO2 の年間吸収量 1 ヘクタール当たり約 8.8 トンの約 2 倍と試算される。但し、これらのデータは、タケと杉の呼吸による CO2 排出量が考慮されていないことや竹林、杉林夫々の生育場所、環境等が異なるので単純比較は出来ない。更なる研究結果が待たれる。

### 2-3. 『いなちくの製造(レシピ)』 NPO 法人いなだに竹 Links 伊藤隆子氏

- ・伊那谷のメンマ「いなちく」の製造(レシピ)について解説があった。
- ・主な使用竹種は孟宗竹。
- ・以下レシピの大筋はネクストで試作したものとほぼ同様であるので、相違点やポイントのみ記載する。
- ・幼竹を伐採する部分は最短でも地上 0.5m 部分(下部の硬い部分はゴミになり易いため)。
- ・剥いだ竹皮がゴミとなって、その処分方法が課題となっている。
- ・メンマに利用する部分: 目標のメンマはシャキシャキ感のある極太メンマ。穂先から 30cm 程度はシャキシャキ感出ないため使用しない。包丁の入らない部分は硬すぎるので不使用。節付近の紫色になっている部分は筋っぽく食に適さないため不使用。
- ・茹では、たっぷりのお湯で幼竹が泳ぐくらいで、アクはこまめに取る。
- ・茹での後は、水洗する。商品としての品質管理のため、残った皮片や孟宗竹の皮のうぶ毛を除去する。但し、水洗により幼竹の温度が食中毒菌繁殖防止出来ない 40℃ 以下に下がってしまうため、塩蔵品の保管は 5℃ 前後の冷蔵庫(事業者の冷蔵庫)。
- 私見としてコスト大であろう。
- ・脱塩は、やや塩味が残るくらい。
- ・脱塩後の保存には、孟宗竹抽出物(自然由来の保存料)を使用する。

### 2-4. パネルディスカッション『多様な主体との協働による里山・竹林整備』

- ・竹林整備の「飯田モデル」を構築しているキーパーソン達によるパネルディスカッション。
- ・「飯田モデル」に関係している団体等は、飯田市役所、飯田市の小学校、飯田市の高校、天竜川下りを運営している一般企業。
- ・特に、飯田市のある小学校で、毎年 5 年生の「総合学習」として竹林整備をしているとのこと。子ども達にとって良い経験になっているとのこと。
- ・このパネルディスカッションでも二人の高校生がパネラーとして参加していたが、メンマサミットの受付、道具等の移動等いろいろなことに多くの高校生がスタッフとして参加していたことは素晴らしいと思った。
- ・やはりこの「飯田モデル」でも、一般企業が参加し経済循環を作り出している。

## 3. 17:00~19:00 交流会

- ・多くの方々と名刺交換し、いろいろなことを話し、質疑応答等で有意義な時を過ごせた。
- ・この場でも、施設見学などでお世話になっている富山県の茶木さんからいろいろなキーパーソンを紹介頂きありがたかった。

以上